

史跡 長七谷地貝塚

長七谷地貝塚は、北日本で知られている貝塚の中では最古のもの 1 つです（紀元前 6000 年頃）。この遺跡での発見は、沿岸地域の初期の集落における食料と生活に関する知見に加えて、先史時代の日本における暮らしを形作った環境要因に関する知見を提供してくれます。

海面と海岸線

この遺跡は、五戸川の氾濫原を見下ろす台地にあり、海岸からは数 km 離れています。8,000 年前、長七谷地貝塚は湾を見下ろす位置にあったのでしょうか。1 万年以上前に最終氷期が終わった後、気温が徐々に上がって海面が上がり、海岸線が内陸部に進んできました。これにより、魚を獲り貝を集めるのに理想的な浅い湾と広い干潟ができました。

食料と生活

この遺跡では多様な漁具が発見されており、豊かな漁労文化の証拠を提供しています。これらの漁具には、骨角製の組み合わせ式釣り針、銚先、漁網につける石錘などがあります。貝塚の調査により、約 30 種の貝類と、ほぼ 20 種の魚の骨が出土しました。鳥と哺乳類の骨があることも分かりました。

八戸市博物館

長七谷地貝塚からの出土品は、八戸市博物館 [\[リンク\]](#) に展示されています。展示では、先史時代から近代までの八戸の歴史が紹介されています。少額の入館料がかかります。情報の一部は英語でも提供されています。

関連遺跡

北日本で貝塚が発見されたその他の遺跡には、北黄金貝塚 [\[リンク\]](#)（北海道）、入江・高砂貝塚（入江貝塚）[\[リンク\]](#)（北海道）、入江・高砂貝塚（高砂貝塚）[\[リンク\]](#)（北海道）、田小屋野貝塚 [\[リンク\]](#)（青森）、およびニツ森貝塚 [\[リンク\]](#)（青森）などがあります。